第７課　対立が起きるとき

【暗唱聖句】

「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」ガラテヤの信徒への手紙3章 28節

【今週のテーマ】

【日曜日・民族的偏見】

「そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである」使徒6：1

初代教会においてある問題が生じました。それは民族的偏見あるいは軽視から生じたもので、同じユダヤ人であり生活のサポートを必要としていた未亡人たちでありながら、純粋なヘブライ文化の伝統をもつ未亡人に比べて、ギリシャ文化の伝統を持つ未亡人が日々の配給のことで差別を受けていたというのです。この感覚的差別が真実かどうか聖書には書かれてありませんが、少なからずこの問題は初代教会の一致を脅かす問題でした。この対立を解くために、祈りつつ2つのことが決められました。

「そこで、十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします」使徒6：2～4

一つ目は食事の配給を行うために執事を選ぶということ。彼らは霊と知恵に満ちた評判の良い人たちで、7人が選ばれました。つまり差別や分裂を引き起こすような問題を放置せず、その問題を解決するために奉仕する専門の人たちを選んだということです。興味深いことに、7人全員がギリシャ語を話す人たちでした。そして霊と知恵とに満ち評判の良い人たちでした。

次に、今まですべてのことに対して頼りにされていた12弟子たちは、このような類の問題は執事に任せ、自分たちは祈りとみ言葉に専念するということでした。この問題は一つの体を立てあげていくために、特定の人が何もかもするのではないということを理解する上で役立ちました。ただこの祈りとみ言葉による宣教の働きと、人々の必要に答える奉仕の働きは、同じ重要な働きとして理解され、実践されていきました。ルカは宣教と奉仕を同じディアコニアという言葉を用いていることからもそのことがわかります。

【月曜日・異邦人の改宗】

異邦人たちの回心は、教会の存続さえ脅かされるような状況を作り出しました。回心した異邦人をありのままに受け入れることは、ユダヤ人クリスチャンたちを少なからず戸惑わせました。イエス様をメシアとして信じたユダヤ人たちが最初の教会の中心でしたが、彼らの多くが旧約聖書の教えに忠実なものたちであり、そのため異邦人たちを汚れたものとして見てしまう傾向があったのです。

　そのような中でペテロが不思議な幻を見せられます。それは天が開かれ、上から食べてはならないと教えられていた動物が入った大きな布が下りてきて、神様が「食べなさい」というものでした。ペテロは「できません。清くないものを食べたことがありません」と言うと、「神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない」と主は言われます。そして、このようなことが3度繰り返されたのでした。ペテロはこの幻は何を意味しているのだろうと考えていると、突如彼を尋ねてくるものがありました。それはカイザリヤに住んでいるコルネリオという百卒長のもとから遣わされた者で、彼はコルネリオがペテロを招いているというのでした。実はコルネリオのもとに天使が現れて、ペテロを招くようにと促していたのでした。ペテロがコルネリオの家に行くと、コルネリオだけでなく大勢のものが集まっていました。コルネリオはペテロにこう言いました。

「今わたしたちは、主があなたにお告げになったことを残らず伺おうとして、みな神のみ前にまかり出ているのです」使徒10：34

何と素晴らしいことでしょうか。異邦人の中にも福音を聞きたい人たちが大勢いたのです。ペテロはどれほど驚き、また感動したことでしょう。ペテロはこう言いました。

「そこでペテロは口を開いて言った、「神は人をかたよりみないかたで、神を敬い義を行う者はどの国民でも受けいれて下さることが、ほんとうによくわかってきました」使徒10:34，35

神様がどんな人でも偏り見ることがないことが、ペテロは本当によく分かってきたと言います。これまで信じてきたことが間違っていたということを悟らせるために、神様はペテロとコルネリオの二人を超自然的な方法で引き寄せたのでした。神様がわたしたちをどのようにみられるのかと言うことは、わたしたちが人をどのように見なければならないのかということを考えるうえで重要です。これは時間がかかってでも悟らなければならないことでした。一致の原則がここにあるからです。ペテロはゆっくりと、しかし確信をもってそれがわかるようになっていくのでした。さらに、ペテロがイエス様のことを話していると、その話の途中でそこに集まっていた人たちの上に聖霊が下ります。

「ペテロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった。割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たちは、異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれたのを見て、驚いた。それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである。そこで、ペテロが言い出した、「この人たちがわたしたちと同じように聖霊を受けたからには、彼らに水でバプテスマを授けるのを、だれがこばみ得ようか」。 こう言って、ペテロはその人々に命じて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けさせた。それから、彼らはペテロに願って、なお数日のあいだ滞在してもらった」使徒10：44～48。

ユダヤ人と異邦人の間を取り持つために聖霊がお膳立てなさったのです。聖霊はイエス様が私たちと共にいてくださる印でした。それを異邦人も受けたのです。聖書の知識もほとんどなかったことでしょう。イエス様のこともどれほど知っていたのでしょうか。もちろん割礼も受けていませんでした。しかし、そんな異邦人たちに同じ聖霊が与えられたのです。これはペテロに同行していたユダヤ人クリスチャンたちにとっても本当に驚くべきことでした。ユダヤ人たちも異邦人たちもみな等しく神様から愛されていることが明らかとなったのでした。そしてそれはバプテスマを受ける資格があることの十分な印として彼らは受け止めたのでした。

【火曜日・霊が導いておられる】

カイサリアのコルネリウスたちの間に起こった素晴らしい出来事につては、すぐにエルサレムの教会にも届きました。ところが、彼らは異邦人たちが救われたことの喜びよりも、ペテロが異邦人たちと食事をしたことを問題視しました。神様が人を偏り見ない方であるという理解がまだエルサレムの教会員たちにはなかったのです。

「あなたは割礼を受けていない者たちのところへ行き、一緒に食事をした」使徒11：3

そこでペテロはカイサリアで行った出来事について詳しく説明していきました。そしてエルサレムの人々を納得させたのは、「聖霊が最初わたしたちの上に降ったように、彼らの上にも降ったのです」（使徒11：15）と伝えたことでした。ペテロは「主イエス・キリストを信じるようになったわたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなさるのをどうして妨げることができたでしょうか」と続けたところ、エルサレム教会の人たちは「この言葉を聞いて人々は静まり、「それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ」と言って、神を賛美した」（使徒11：18）のでした。聖霊が人々を一つにしていく大きな役割をはたしていったことがわかります。そして、このような出来事は、サマリアやフェニキア、キプロス、そしてアンティオキアなどにどんどん広がっていくことになります。これはまさに、イエス様が昇天される前に語ったことの成就でした。

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」使徒1：8

【水曜日・エルサレム会議】

「ある人々がユダヤから下って来て、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と兄弟たちに教えていた。それで、パウロやバルナバとその人たちとの間に、激しい意見の対立と論争が生じた。この件について使徒や長老たちと協議するために、パウロとバルナバ、そのほか数名の者がエルサレムへ上ることに決まった」使徒言行録15章2節

保守的なユダヤ人クリスチャンの中に、割礼を受けなければ救われないと教えているものたちがいました。これらの人たちは、ユダヤ教からキリスト教に改宗したわけですから、必ずしもがちがちの保守的思想を持った人たちというわけではなかったと思われます。しかし、彼らの聖書理解や伝統的な考えによれば、救いは契約の民であるユダヤ人のものだったわけで、異邦人たちにも救いの道が開かれるということに対して、彼らは否定的なわけではありませんでしたが、最低限契約の民のしるしである割礼は受けるべきだと考えました。これは初代教会が世界に広がっていく過程において起きた大きな問題でした。

「さて、ケファがアンティオキアに来たとき、非難すべきところがあったので、わたしは面と向かって反対しました。なぜなら、ケファは、ヤコブのもとからある人々が来るまでは、異邦人と一緒に食事をしていたのに、彼らがやって来ると、割礼を受けている者たちを恐れてしり込みし、身を引こうとしだしたからです」ガラテヤの信徒への手紙2章 11、12節

また神様が人を偏り見ない方だと理解していたペテロは保守的なクリスチャンがやってくると、それまで一緒に食事をしていた割礼を受けていない異邦人たちと食事をすることを止めるという態度をとり、パウロから激しく叱責されます。このような態度を取らざるを得ないような不健全な状態にあったということです。そこで急きょエルサレムに集まって会議が開かれることになったのでした。バウロとバルナバ、そしてペテロがその席上で神様の恵みがどのように異邦人たちの上にも現わされているかを証しました。問題の解決は、神様が異邦人たちにどのように関わっておられるのかという点にありました。考えてみると、旧約聖書はユダヤ人の歴史であり、契約の民に対する教えであって、異邦人については詳しくは言及されていません。だから、実際に神様が異邦人をどのように救われたのかということが重要になっていきました。

【木曜日・難しい解決策】

「その日にはわたしはダビデの倒れた仮庵を復興し、その破れを修復し、廃虚を復興して昔の日のように建て直す。こうして、エドムの生き残りの者とわが名をもって呼ばれるすべての国を彼らに所有させよう、と主は言われる。主はこのことを行われる」アモス書9章 12節

「主はこう言われる。「わたしが、わたしの民イスラエルに継がせた嗣業に手を触れる近隣の悪い民をすべて、彼らの地から抜き捨てる。また、ユダの家を彼らの間から抜き取る。わたしは彼らを抜き取った後、再び彼らを憐れみ、そのひとりひとりをその嗣業に、その土地に帰らせるもしこれらの民が、かつてバアルによって誓うことをわたしの民に教えたように、わが名によって、『主は生きておられる』と誓うことを確かに学ぶならば、彼らはわたしの民の間に建てられる」エレミヤ書 12章 16節

これらの聖句は、異邦人にも救いの道が開かれていることを告げています。異邦人たちが救われることは、新約時代になって突然起きたことではないのです。イスラエルの民は異邦人に主を証するために選ばれたわけであり、そのときがついに来たわけです。しかし、その使命を忘れてしまったために、異邦人たちのつまづきの石になるところでした。聖霊は彼らの目を開くために、今までになかったような方法と勢いで、異邦人たちに救いの御手を伸ばされました。それは急激な意識改革を求めるものでしたが、ユダヤ人クリスチャンたちは異邦人に対する神様の救いの業を目の当たりにすることで、主の御心を理解するようになっていきました。エルサレム会議でも賢明な判断が下され、それを聞いたアンティオケの教会の人たちは「励ましに満ちた決定を知って喜んだ」（使徒15：31）のでした。